

## 「労作実習」に対する児童教育学科卒業生の 情緒的イメージ

岩崎 哲郎\*・立木 徹\*\*・伏見 陽児\*\*\*

### 問題と目的

近年、大学の授業改善に関する書籍が次々と出版されている（たとえば、伏見2005、2006、伊藤・大塚1999、岩崎・伏見2003、立木1996）。大学の大衆化に伴い、大学の教育機関としての役割の比重は大きいものになってきた。大学教員が教育目標の達成のためにカリキュラム開発、授業開発に取り組むことは必須となってきたといえよう。

本研究は、茨城キリスト教大学における「労作体験教育」の改善をテーマとして実施された、卒業生（および在学生）に対する調査研究の一部をまとめたものである（立木・岩崎・伏見2006）。

茨城キリスト教大学文学部の児童教育学科には、労作実習を中心とした「労作体験教育」という科目が開講されている。この科目は、キリスト教教育の理想を全人教育論に基づく人格形成の教育体系として展開することを目指し、実践的、体験的指導のできる者を養成するために設置されたものである。

科目設置（児童教育学科は1982年開設）から20年が経過する中で、さまざまな労作実習が行われてきた（現在は、本稿の第1著者が授業を担当している）。取り上げられた活動内容の違いや重みづけに着目すると、これまでの労作実習はおおきく次の3つの時期に分けることができる（立木ほか2006）。

第Ⅰ期：1982年度（学科開設年度）入学生～1986年度入学生

第Ⅱ期：1987年度入学生～1993年度入学生

第Ⅲ期：1994年度入学生～2001年度入学生

第Ⅰ期（1982～1986年度入学生）は、農業（畑作）と園芸が中心であり、それに森林管理（植林）が付け加えられた。1986年十王自然学習センター管理棟が完成、大学キャンパス（大みか）内の学校園に加え、十王の実習地も利用することになった。1987年から現在の担当者が授業を行うことになり、労作実習の内容も変化してきた。第Ⅱ期（1987～1993年度入学生）には、学校園での栽培と花壇作り、自然学習センターの開墾と森林管理（下草刈り、枝打ち作業）、枝の美しさと素朴さを体験するグループ別課題学習が授業の柱となった。栽培に関して言えば、種まきから加工・調理までという方針で、収穫物の調理も取り入れられた。具体的には、大豆の種まきから豆腐作り、ソバの種まきからソバ切りま

---

\* 茨城キリスト教大学文学部

\*\* 茨城キリスト教大学生活科学部

\*\*\* 千葉大学教育学部

で等である。大学大綱化に伴って時間配当が変わった第Ⅲ期（1994～2001年度入学生）には、限られた時間の中で行うことのできる、バター作り、草木染め、紙漉き等が多く取り入れられるようになってきた。

このように、同じく「労作実習」という名称ではあるものの、その内容はかなりの程度異なるものになっている。しかしながら、その教育効果については十分な比較検討がなされてきたとは言いがたい。理由のひとつに、労作体験教育（労作実習）の効果を測定するための評価基準尺度がなかったことがあげられる。

これを受け、岩崎・立木・伏見（2004）は、評価基準尺度を開発する準備段階として、「労作実習」についての大学生の情緒的イメージがどのような因子から構成されているのかを調査した。SD法を用いて得たデータを因子分析した結果、労作実習に対する大学生の情緒的イメージは、活発さ、好意、洗練さ、大変さの4つの下位因子から構成されていることが示された。

本研究では、その項目を用い、労作実習を体験した卒業生が「労作実習」に関してどのような情緒的イメージを持っているのか検討することとした。なお比較対照のために、労作実習を体験済みの現役大学生（2003年度3年次生）に行った同一調査のデータも含めて検討する。

## 方 法

### 調査対象

茨城キリスト教大学文学部児童教育学科卒業生のうち845名（2005年4月時点での児童教育学科卒業生は1694名であり、卒業生名簿からそのうちのほぼ5割をランダムに選んだ）を対象とする。

### 調査方法

調査対象者が卒業した当時の連絡先に、自記式質問紙を郵送。記入後に郵送による返送を求めた。「労作体験教育」意識調査の一貫として、他の質問紙と同時に配布した（立木ほか2006）。調査にあたって、「データ処理に際しては個人情報保護に留意する」旨を調査用紙に記入しておいた。なお調査はすべて無記名であった。

### 調査時期

2005年10月下旬～11月下旬。

### 調査内容と手続き

岩崎・立木・伏見（2004）の研究結果に基づき、活発さ因子から4項目、好意因子から4項目、洗練さ因子から4項目、大変さ因子から3項目を、いずれも因子負荷量の大きい順に選択し、FIG. 1に示したような調査用紙を作成した。

15項目の得点はすべて「+4～-4」の9段階であり、+4に近づくほど活発であり、あるいは好意的であり、あるいは洗練されており、あるいは大変であるととらえていることを示す（「めんどろな－簡単な」「困難な－容易な」の2項目に関しては、実際には「簡単な－めんどろな」「容易な－困難な」という逆転項目にして調査したが、FIG. 1には、分かりやすいように他の項目と同じ方向に直して示した）。

上記項目のほか、性別、入学年度等を記入する欄を設けてある。

【質問】「労作体験教育（労作実習）」について、現在どのようなイメージを持っていますか。次の15の尺度について、あなたの感じ方を示す数字に○印をつけてください。

		非常に	かなり	わりあい	やや		やや	わりあい	かなり	非常に	
◇	面白い	4	3	2	1	0	1	2	3	4	つまらない
★	しゃれた	4	3	2	1	0	1	2	3	4	やぼったい
◇	好きな	4	3	2	1	0	1	2	3	4	嫌いな
◇	楽しい	4	3	2	1	0	1	2	3	4	苦しい
※	きびしい	4	3	2	1	0	1	2	3	4	やさしい
★	現代的な	4	3	2	1	0	1	2	3	4	古風な
◇	興味ある	4	3	2	1	0	1	2	3	4	興味ない
※	めんどうな	4	3	2	1	0	1	2	3	4	簡単な
☆	あたたかい	4	3	2	1	0	1	2	3	4	つめたい
※	困難な	4	3	2	1	0	1	2	3	4	容易な
★	きれいな	4	3	2	1	0	1	2	3	4	きたない
☆	元気な	4	3	2	1	0	1	2	3	4	病弱な
★	派手な	4	3	2	1	0	1	2	3	4	地味な
☆	協力的な	4	3	2	1	0	1	2	3	4	排他的な
☆	健康な	4	3	2	1	0	1	2	3	4	不健康な

FIG.1 質問紙の内容

註 ☆は活発さ因子項目、◇は好意因子項目、★は洗練さ因子項目、※は大変さ因子項目を示す。

## 結果と考察

### 分析対象者

質問紙回収数は206部であり、回収率は24%であった。記入もれのあったものを除いたところ、第Ⅰ期38部、第Ⅱ期57部、第Ⅲ期71部となった。比較対照のために用いた2003年度3年次生のデータ数は90であった。これらを以下の分析の対象とした。

### 群別結果

「+4～-4」の9段階で求めた値をそのまま得点とみなして、15項目それぞれの平均点

TABLE 1 結果

	I 期	II 期	III 期	3 年
<b>【活発さ因子】</b>				
あたたかい—つめたい	2.47	2.79	2.54	1.99
健康的な—不健康な	3.34	3.26	3.10	2.50
協力的な—排他的な	2.87	2.74	2.59	1.98
元気な—病弱な	2.74	2.65	2.18	2.29
平 均	2.86	2.86	2.60	2.19
<b>【好意因子】</b>				
好きな—嫌いな	1.84	2.37	2.13	2.08
楽しい—苦しい	2.05	2.70	2.41	2.32
面白い—つまらない	2.26	2.68	2.23	1.92
興味ある—興味ない	1.97	2.51	2.37	2.21
平 均	2.03	2.57	2.29	2.13
<b>【洗練さ因子】</b>				
きれいな—きたない	-0.34	-0.11	-0.17	0.14
派手な—地味な	-1.50	-1.39	-1.10	-0.74
現代的な—古風な	-0.32	-0.14	-0.28	-0.07
しゃれた—やぼったい	-0.11	0.07	0.06	0.30
平 均	-0.57	-0.39	-0.37	-0.09
<b>【大変さ因子】</b>				
きびしい—やさしい	-0.18	-0.53	-0.76	-0.44
めんどろな—簡単な	0.00	-0.51	-0.25	-0.90
困難な—容易な	0.37	-0.39	-0.30	-0.23
平 均	0.06	-0.48	-0.44	-0.52

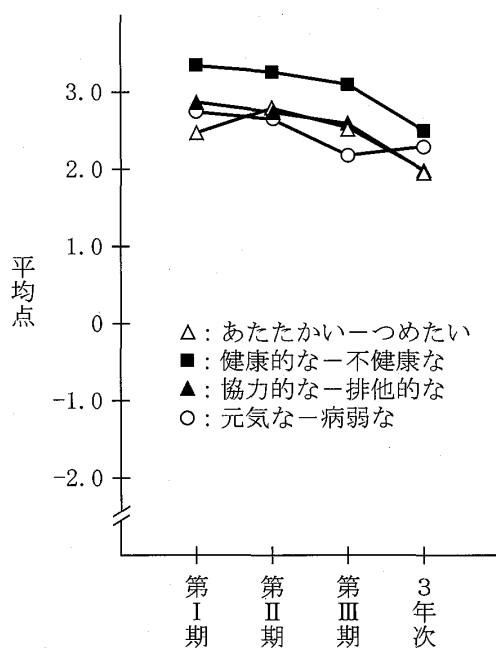


FIG. 2 a 活発さ因子項目

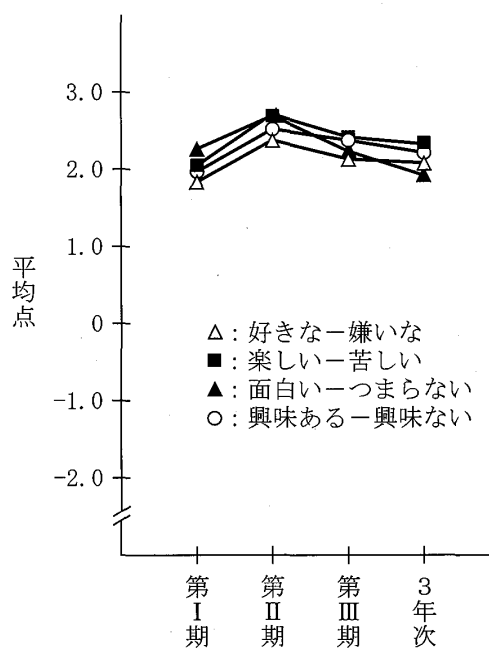


FIG. 2 b 好意因子項目

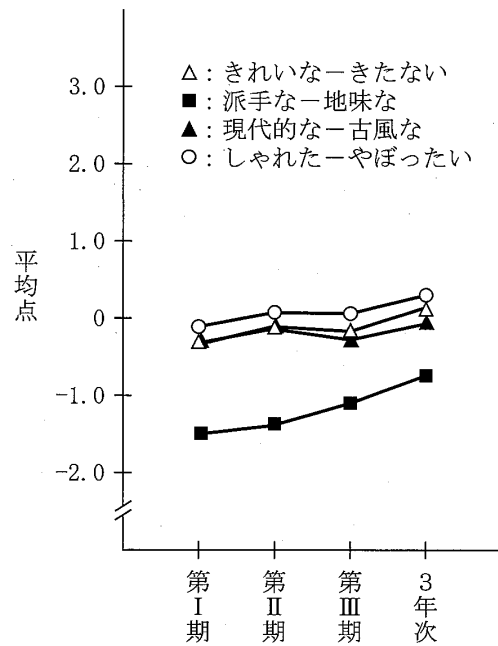


FIG. 2c 洗練さ因子項目

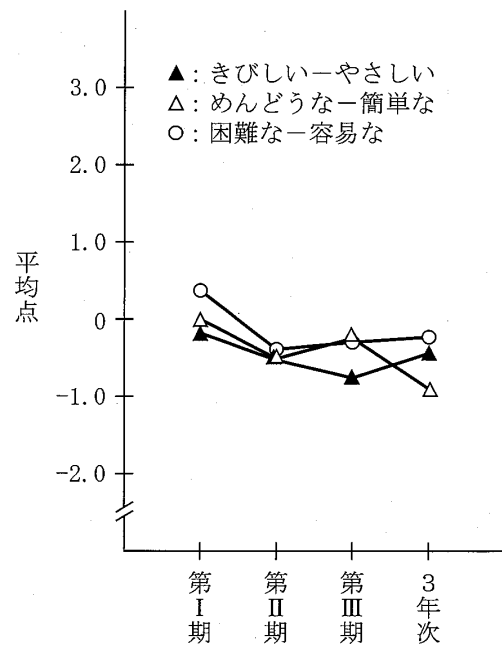


FIG. 2d 大変さ因子項目

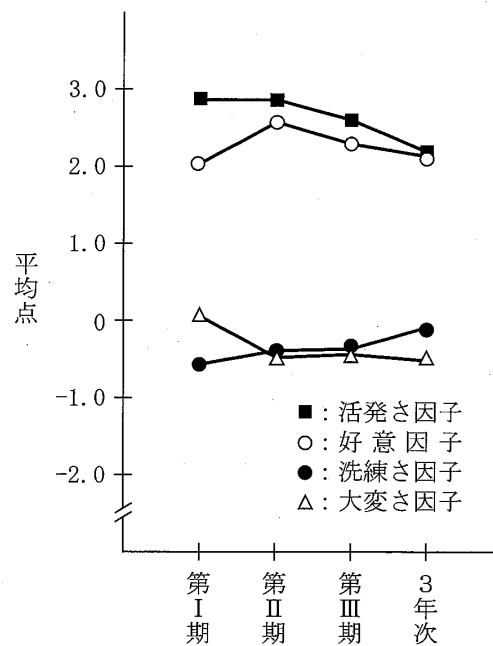


FIG. 3 各因子の平均得点

を群別にして TABLE 1 に示す。因子ごとまとめた平均点もあわせて示した。TABLE 1 に基づいて図示したのが FIG. 2a ~ FIG. 2d, FIG. 3 である。

活発さ因子は全体としてみると平均が2点を超えており、労作実習に関して、活発だというイメージを持っていることが示唆される。年代ごとに分けてみると、第Ⅰ期と第Ⅱ期の値が高く、これらに比べ若干第Ⅲ期が低く、現役大学生の値はさらに低かった。第Ⅰ期と第Ⅱ期は畑作や森林管理等の力仕事がかかなり大掛かりで行われていた。これに対し、第Ⅲ期以降は、植林などの作業が小規模になり（植林地の不足等により、小規模にせざるを得なかった）、また大綱化に伴うカリキュラムの改訂によって授業時間も減少した。労作実習に関わるのこのような変化が、活発さイメージの差異に反映しているのではなかろうか。

好意因子についても全体的には、活発さ因子と同様に高い平均得点を示している。労作実習に対する好意的イメージの所有が示唆される。年代ごとにみると、第Ⅱ期が最も高く、これに第Ⅲ期が続き、第Ⅰ期が最も低い値であった。種まきから加工・調理までという方針で、大豆の種まきから豆腐作り、ソバの種まきからソバ切りまで等、一連の活動の導入が好印象をもたらした可能性がある。

洗練さ因子は平均得点が0点に近いものの、全体としてマイナス得点であり、労作実習に対しては、「洗練された」というイメージは弱いことが示された。年代別にみると、現役大学生が最も高く、第Ⅰ期が最も低い値であった。これは工芸活動が扱われたかどうかということが反映した結果だと思われる。

大変さ因子の平均得点は0点に近く、全体としてみると、労作実習に対する「大変さ」は中程度だというイメージを持っていることが示唆される。年代ごとにみると、第Ⅰ期が最も高く、他の期に比較して、相対的に、労作実習は大変だというイメージが強いことがわかる。畑作や植林という力仕事の実習の大半を占めていたからであろう。

\*

以上見てきたように、労作体験教育（労作実習）を受講した卒業生が労作実習について所有しているイメージは、彼らが受けた実習内容が反映したものであることが示唆される。このことは一方で、労作実習の体験の影響が、体験後数年あるいは20年経たあとも、かなりの程度残っていることを推測させるものでもある。もちろん、年代が違えば体験後の年数も違うわけであり、記憶期間の違いが影響しているという側面も否定できない。また、質問紙回収率が24%であったということにも留意する必要がある。しかしながら、労作実習での活動内容と学生のイメージの相即性が読み取れるということは、大学における労作実習カリキュラムの吟味に強い意味づけを与えるものになっている。

## 文献

- 伏見陽児 2005 教育学部教師の講義日記—小学校課程科目「教え方と子どもの理解」の実践— 星の環会  
 伏見陽児 2006 続・教育学部教師の講義日記—小学校課程科目「製作活動と子ども」の実践— 星の環会  
 伊藤秀子・大塚雄作 1999 ガイドブック大学授業の改善 有斐閣

- 岩崎哲郎・伏見陽児 2003 大学における授業の改善をめざして一教職科目「生活科教材研究」の実践 東北大学出版会
- 岩崎哲郎・立木徹・伏見陽児 2004 「労作実習」に対する大学生の情緒的イメージ おおみか教育研究, 8, 1-5.
- 立木徹 1996 環境教育の心理学 川島書店
- 立木徹・岩崎哲郎・伏見陽児 2006 「労作実習」に対する児童教育学科卒業生の意識 茨城キリスト教大学紀要, 第40号掲載予定

〔付記〕

本研究は、茨城キリスト教大学研究助成（2005年度）を受けておこなわれたものである。  
関係の方々に深く感謝する次第である。

A Study of Emotional Images of Graduates of Department of  
Elementary Education with Regard to “Work Education”

Tetsuo Iwasaki, Toru Tatsuki, Yohji Fushimi

The present study was conducted to measure emotional images of graduates of department of elementary education with regard to “work education”. A questionnaire consisting of four factors affecting emotional images was administered to university students. The four factors were active image, preference image, sophisticated image and difficulty image factors. We interpret the results in relation with activities in “work education”.

Key Words: work education, emotional images, university students